

特集「参加のカタチ」

No.2

参加の
場づくり

浅野 健

まちづくりの現場において、住民参加は当たり前のように行われるようになってきている。だが、その多くはコアな人の集まり、関心のある人の集まりに偏っており、まちづくりの広がりや新しい展開に限界がある。まちには様々な年齢や立場、多様な価値観の人々が暮らしており、それぞれの地域における問題を解決するために、より多くの人々が参加して水平な立場で議論し、活動する場づくりを追求していくことが必要である。

例えば、これまであまり交わるものがなかった地域コミュニティと企業の交わり、あるいは地域への参加が考えられなかった高校生など、これらをあえて交わるような場づくりをすることで化学反応が起こることが期待される。参加の場づくりを検討する上で、日頃気をつけている視点を改めて整理してみた。

利用者目線の場づくり ～ダイバーシティ・インクルージョン～

地域には子ども、高齢者、障がい者、LGBT、外国人など様々な人々が暮らしており、利用者目線でどのような人々に調査や計画づくりに関わってもらうかが重要である。この点で常に参考になっているのが、二〇〇五年二月に開港した中部国際空港の建設時の策定プロセスである。学識経験者、障がい当事者等で構成する「ユニバーサルデザイン研究会」を立ち上げ、積極的に利用者目線での意見が取り入れられ、また障がい者団体と空港会社が業務契約を結び協働して空港を作り上げていった。注目すべきはその意見反映の過程であり、基本設計、実施設計、施工の各段階でユニバーサルデザイン研究会が意見を集約し、空港会社がそれらの意見を反映していったことにある。

当社でも昨年、瑞穂公園周辺のバ



瑞穂公園周辺バリアフリー調査の様子

アフリー基本構想の策定に関わる機会があり、地域の自治会、障がい当事者や支援者、子育て支援者など様々な方が参加し、地域住民や利用者目線で様々な意見を取り入れる場づくりを支援した。その策定プロセスにおいては、まちづくりに関わる自治体の様々な部局や警察も参加し、地域住民や障がい当事者の方々と一緒にまち歩きを行い、地域の課題を共有する場となった。

担い手発掘の場づくり ～ヨソモノ・ワカモノ～

まちづくりにおいていかにヨソモノ・ワカモノを巻き込むか、というのは以前からよく言われる。そこにはヨソモノ目線、ワカモノ目線をまちづくりに取り入れることで新たな価値観を生む、という期待が込められている。北九州などに端を発するリノベーションまちづくりや、当社も関わった名古屋市の商店街オープン事業はその一例である。

商店街オープン事業では、空き家・空き店舗などの遊休不動産の活用に向け、市民や行政が参加してリノベーション事業計画を作成し、遊休不動産の所有者とヨソモノである起業家や事業者などを結び付け、新しい事業展開や賑わいづくりにつなげている。その結果、日替わりシェフの食堂、カフェ・洋菓子・花屋+事務所・ワークシ

ヨップスペース、公立図書館と連携した図書スペース、本屋など、今まで商店街になかった店舗が誕生し、新たな出店の呼び水にもなっている。

また、地域に愛着を持つ住民やファインを醸成するシビックプライドの視点では、これまであまりまちづくりの場に出てきていない高校生などの参加が期待される。当社でも過去に、名古屋市中東区の区民ミーティングの一環で、地元の高校生が池に繁殖する在来種を保全するために外来種であるスイレンの抜根調査活動に参加し、



高校生ワークショップの様子(オンラインで実施)

活動の普及に向けたアイデアを提案する場を支援した。アイデアを提案する高校生ワークショップの場は、当時、新型コロナウイルス感染症拡大中であったためリモートで実施した。

クリエイティブ・イノベーションが生まれる場づくり ～地域・企業・大学～

まちをよりよくしていくために、ICT技術の実装、ドローン、空飛ぶ車などに代表される交通・物流の革命が進みつつある。こうしたイノベーションやクリエイティブな事業をまちが受け入れる環境づくりが必要であり、これらの多くには規制緩和など制度の問題も含んでおり、産学官による連携が求められる。まちづくりの連携拠点としては二〇〇六年設立の柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)が実績を重ね、全国にアーバンデザインセンターの設立支援を行っている。産学官のプラットフォームとしては今年度から本格実施の中野ダイバーシティプラットフォーム(NDP)があり、明治大学や民間企業の共同研究者に加え、障がい者、ジェンダー、LGBTなど様々な立場の人を迎えてダイバーシティを推進する準備が進められている。また、ナゴヤイノベーションズガレッジ、などのキャンパスのようなスタートアップ拠点が各地に形成されており、スタートアップ企業と地域とを結びつけることで双方に



スタートアップ拠点「なごのキャンパス」は地域活動団体にも利用されている

とってwin-winの関係づくりが期待される。現時点では、スタートアップ拠点は、企業同士の交流にとどまっている感があり、社会課題解決の担い手として期待されるスタートアップ企業をいかに地域に巻き込むかは、我々まちづくりの関係者も課題として持っておきたい。

参加をデザインする役割

上述した参加の場づくりは、PPPやPFIなど公共施設における官民連携による整備・運営や、SDGsまちづくりなど、今後さらに多様な場面で重要になってくる。特にPPPやPFI(公園のPark-PFI)は、官民連携の名のもとに民間企業と自治体が来館者増などの数値のみで評価し、住民参加や住民満足度がおろそかになるという課題もはらんでいる。主に自治体をクライアントとするまちづくりコンサルタントとしては、サービスの利用者であり、運営の担い手となる地域住民をいかに巻き込むかが課題となる。新しい形をつくるため、参加をデザインするのがまちづくりコンサルタントの役目だと考える。

せと銀座通り商店街に新しい風

安間 和奏

仕事で瀬戸市を訪れた際、閑散としたイメージのあったせと銀座通り商店街の様子が随分と変化していたので、改めて足を運んでみた。多くの商店街が抱える空き家問題について、せと銀座通り商店街も同じように頭を悩ませていたが、ここ数年不動産のマッチングを活用して商店街の空き家に染付教室、オーダーメイドの自転車屋、古着、セレクトショップ、カフェなどの店舗が出店し、魅力あふれる商店街へと変化している。瀬戸に縁のある人たちが出店しているのかと思いきや、多くは不動産の紹介や他の出店者の影響など今まで関わりのなかった人(ヨソモノ)たちが瀬戸市を選んで出店しているのだ。

商店街といえば以前は地元の人々が日常的に利用する店が立ち並ぶ場所であったが、近年では大型スーパーなどに客が流れ、以前と同じ商店街の姿では維持が難しくなっている。せと銀座通り商店街の最近の出店をみると、日常使いの店というよりは観光客に向けた店舗が並んでおり、市外からその店目当てで足を運んでいる人も多く、関係人口の増加につながっている。昔からある商店街に新しい風を吹かせると一見対立が生じるのではないかとされるが、瀬戸はものづくりのまちであることから新しいものに対して抵抗がなく、地元の人からも受け入れられやすかったのかもしれない。それがヨソモノにとって新しい活動がしやすい場となったのではないだろうか。今後の仕事において潜在的なニーズの把握はもちろんのこと、凝り固まり始めている思考に縛られず、参加しやすい場づくりをしていくことが重要だと考える。



新しい店舗が入ったせと銀座通り商店街